

もっと知ろうよICA(3) ICAの構成 その2

前回は、組織図とともにICAの活動の中心となっている主要な委員会、部会などを簡単に紹介した。今回は委員会に焦点をしぼり、ICAの活動をながめてみよう。

ICAの多用な活動は、7つの部会=セクションと、15の委員会=コミティが支えている。そのほかに、作業グループがあって、規約には明示されていないが、作業部会、委員会、部会の順にICAの組織内での位置付けが高くなっていく。ICAで検討すべきテーマは、しばしば作業グループによる検討が始まる。あるいは直ちに委員会が設けられることもある。そしてさらに継続的な活動を必要とするものが、部会へと変化していく。最近では、アーキビスト教育養成部会が、1988年に委員会から部会になった。

このようにICAの各委員会はその時々

界のアーキビストが直面する諸問題の検討の場を設けるという性格がとくに強くあらわれる。情報化時代の専門家としてのアーキビストをテーマに掲げた1992年のICA大会の際には、建築記録委員会、科学記録委員会、防災委員会などがあらたに発足している。一方印章学委員会は、旧くから一多分ICA発足のころから続いている委員会だ。視聴覚資料委員会、文書館施設・建物委員会、電子記録委員会、文書館自動化委員会、文書館法制委員会、オーラルヒストリー委員会、文書館史料保存委員会、現代記録と記録管理制度、史料評価委員会、画像技術委員会と、これで15種類。委員会は委員長と事務局、それに委員で構成され、各委員はそれぞれの目的を明文化している。但し予算面の情報はあまり知られていない。

ICAの委員会の構成を国別でみると、ICAという組織のなかでの各国の積極性や、専門性との関係がなんとなく感じられる。例えば、委員の人数を見ていくと、フランスとアメリカがともに14人で飛び抜けて多い。そのほかではカナダ12、イギリス8、イタリア8、オランダ8、スウェーデン7などが目につく。とはいえ、世界の各地域からまんべんなく代表を出すよう配慮していることが、メンバー

の国籍にも現れているようだ。因みにアジア諸国では、日本、インドネシア、シンガポールの各国から各1名の計3名、アフリカではボツワナから1名、委員会のメンバーが出ている。このような視点でICAを観察すると、文書館の専門的な諸問題の検討を行うには、まだ欧米先進諸国の主導によらざるをえない図式のようなのだ。

(国際資料研究所・小川千代子)